

### 34 浅井貞庵と尾張の本草学

遠藤 正治

尾張の本草学に対する今日の評価は、伊藤圭介の「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歷雜記」の記述が大きく影響しているように思われる。圭介はの中で、尾張で最も早く本草学を唱えたのは松平君山であり、文化の頃から本草学を嗜む者が頗る多くなつたとし、時々集会した者として、浅野春道・水谷豊文・大窪太兵衛・岡林清達・柴田洞元・西山玄道・浅野文達および大河内存真の八名を挙げてゐる。この中に、尾張医学館主で本草を講義し、御薬園奉行を兼ね文化期の尾張本草学を荷なつた浅井貞庵を落しているのはなぜであらうか。

享和三年生まれの圭介にとっては幼年期のことであり、事情をあまり知悉していなかつたこともあろうが、貞庵を正当に位置づけているとは言い難い。

貞庵はすでに天明八年自邸内に私設の医学校を開き、侍医の子弟の講習をはじめている。寛政十一年医師取締試験の統督に任ぜられ、落費で学館を創建することを命ぜられる。文化年中、蒲焼町の邸内に講堂・静観堂が完成し、ここで素問・靈樞・難經・扁倉伝割解などを講義した。春秋二次の試問においては、本業として素問・靈樞・傷寒論・金匱要略の中から、兼業として『本草備要』・『薬性歌括』あるいは『本草綱目』の中から出題した。

ここで、『薬性歌括』は明の龔廷賢の著で日用の薬性と薬用のごく要点を記憶に便利な四韻詩の形式でまとめたものである。貞庵はこれをテキストにして本草講義を行ない、その講義録『薬性歌解』（文化八年初冬）を残した。

この中で貞庵は「薬性歌は小学、本草は大学」と位置づけ、薬性歌の学習を勧め、また、「今世間に独として本草の本草家と云はなし、流石に時珍也、これは各別の人」「薬性のことに委きは張元素、これは抜群の人、薬性の本に負ふと云ふことを始めて云出せり、其以来張氏の余功を以て東垣、つゝいて王好古、是等の人はその薬の本然の訳を知れり」と、李時珍の体系的な本草学と張元素に

はじめり王好古の『湯液本草』にいたる金元の薬正論を高く評価している。

貞庵は京都で修学したと伝えられるが、その医学と本草学の師は明らかにされていない。劉張医方派すなわち後世派の別派とされる浅井家の家学の影響もあろうか。

貞庵は「今の草本に四通りあり」として、日本の本草家を「多識家」「種樹家」「奇方家」「薬肆」の四つに分類し、「右の四家は本草家に似て実は本草家の意をしらぬ異端なり」と論断する。「多識家」は儒者から出た本草家をさし、「老先生門ナレトモ貝原、松岡、君山、蘭山この泉はみな多識家と云もの」と、貞庵の祖父浅井図南の師であった松岡恕庵をも含めて松平君山や小野蘭山など博物の本草家を「異端」なりときめつけている。

貞庵は、実用的な医療のための本草学を重視し、必要な薬種の数も二、三百種で足りるとして、日本的な博物学本草学を嫌ったようである。

「薬性歌」は、貞庵著『薬性歌発端』（文化八年刊）やのち医学館より出版された貞庵校正『薬性歌括』（天保十年）などによって尾張藩ではかなり普及したものと思われる。

る。

柴田洞元の有名な『日用薬品考』（文化七年）も、翼廷賢の『薬性歌』に載る薬品を本としたとしている。これも貞庵の影響の一つといえよう。

文化二年、貞庵は薬園奉行に任ぜられ、御下屋敷御薬園の経営にあたる。薬園奉行としての貞庵は水谷豊文や柴田洞元などすぐれた本草家を御用懸りあるいは手伝懸りとして配下に集め、『薬性歌解』で示された見解とは異ったむしろ博物学的本草学研究を行なわせている。さらに文政十年、門人を督励して『太素経』と『新修本草』の謄写を行い、古医書・古本草書の発掘・紹介につとめるなど、別の貞庵の側面をみせている。

（岐阜県立華陽高等学校）